

安楽寺だより

第 26 号

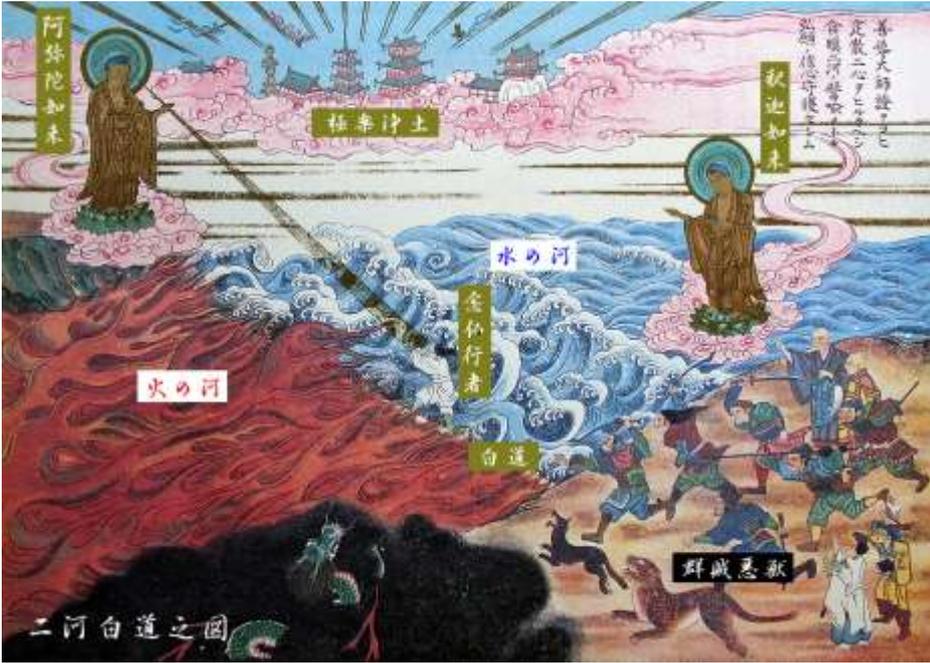
紙面内容

- 2面 「いのちと向き合う御命日」 若院
- 3面 本山御正忌報恩講に参拝
- 4面 日本仏教史⑨ 江戸時代(中)

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

あけましておめでとーございます。本年も宜しくお願ひ申し上げます。宗祖・親鸞聖人が讃えられた七高僧のお一人に善導大師という方がおられます。「二河白道」は、善

善導大師「二河白道」の譬喩



「苦しみの根源を明らかにする」教え

善導大師が説かれた譬喩(たとえ)のひとつです。親鸞聖人は、この譬喩を大切にされ、聖人の主著であります『教行信証』に引用されています。

人間は父母の因縁をいただいて、この世に誕生します。幼年期・少年期を通じて様々な体験をして、この世の生き方を学んでいきます。

幸せいつぱいの順境の中では、人間は真面目に自分自身を問題にすることはほとんど無いように思います。しかし、学問や職業に取り組み、様々な人間関係や生活環境に身を置く中で、生き詰まりを感じる時があります。

進学・就職・結婚など、青年期に経験する壁に対して、どう受け止めどう乗り越えていくのかは、人生の一大事です。

また、老い・病・死という人間にとって避けて通れない壁にどう立ち向かうの

か、壮年期以降の人間にとって最も切実な問題、「後生の一大事」なってきました。

人生の様々な壁が眼前に現れた時に、浄土真宗の教えを聴聞していくと、「自己自身」の生き方・考え方を明らかにすることが問われてきます。挫折・苦境に遭遇した時に、どのように受け止めていくか、「二河白道」の譬喩は、人間の苦しみ・悩みの根源にあるものを明らかにしてくれ教えます。

善導大師は、『浄土へ往生しようと願っているすべての人びとに申し上げます。いまあらためて、仏道を歩まんとする人のために、ひとつのたとえを説いて、信心をまもり、いろいろな非難や疑念を防ごうと思います』との呼びかけのおことばから「二河白道」は始まります。

次号より数回にわたって「二河白道」のおことばをお伝え致します。

「いのちと向き合う御命日」 若院

屋台村での講話

十一月二十七日に西田葬儀社様の屋台村のイベントが開催されました。雲の多い空模様でしたが、大勢の皆様にご足をお運びいただき、楽しんでおられるお姿をお見受けしました。

そのイベントの中で、夏の坊守の法話に引き続き、わたし若院もお話をさせてもらう機会をいただきました。

今回は御命日についてのお話をさせていただきますました。人間としてこの世に生まれるということとは、必ず死に向かって歩まなければならないかもしれません。逃れられない死というものに対して、私たちは恐怖や不安を抱かえて生きています。その死から今一度自分自身のいのちと向き合わせてくれるのが、先立たれた方・ご縁のある方の御命日にあるわけです。人間は誰しも誰かの御命日と関わりを持って生きています。御命日は、「命」の「日」と書きます。死ぬことがなければ生きるということを考えることはありません。自分もいずれば迎えないければならない死があるから

こそ、御命日に先立たれた方のいのちに触れて、命の尊さ・有難さを感じ取っていかねければなりません。ただお坊さんが来てお参りをしてもらう日だけにしてはならないということですよ。

親鸞聖人の正信偈の最初の御言葉に『帰命無量寿如来』という七文字があります。聖人は、この『無量寿』とは、「人間には量ることのできないのちである」と、そういういのちを私たちはいただいている」とおっしゃられる



安楽寺会館2階にて



ています。みな平等のひとつのいのちであり、決して卑下するようないのちはひとつとしてないのです。健康で長生きしたから「良いいのち」、若くして病気を患ったから「悪いいのち」ではなく、どちらも尊い何事にも代えがたいのちなのだと、この『帰命無量寿如来』という御言葉が気付かせてくださっていると私は思います。

御命日に手を合わせていのちの尊さを感じ取っていただける方が、一人でも多くいらつしやればとても幸いに思います。

当日足をお運びいただき誠にありがとうございます。歩んでまいりたいと思っておりますので、宜しくお願ひ申し上げます。

本山報恩講に参拝

昨年十一月二十五日、二十二組の寺院・ご門徒百四十名の皆様と、京都東本願寺「御正忌報恩講」に参拝致しました。十二年に及ぶ御修復が終わり、落ち着きが戻った境内にたたずむと、百二十年前の明治期の東本願寺の輝きがあります。全国から参拝された皆様の顔にも、喜びの様子があるように感じました。

御影堂前の白州に於いて、記念の写真撮影をした後、御影堂の聖人の御真影前に正座し、お勤め声を聴いて静かにお参り致しました。

団体参拝にご参加頂きました皆様には、厚く感謝申し上げます。来年の報恩講にも、ぜひご予約下さるよう宜しくお願い申し上げます。



浄土とは？

私たちは日頃、「亡くなられてお浄土に生まれる」と言いますが、浄土とはどのようなところでしょうか。

阿弥陀経には、『極楽国土は、遠い遠い西方にあり、今でも阿弥陀仏が説法されております。すべての者は、苦は無く楽を受けます』と述べられています。浄土は、いわゆる天国のようなところではなく、仏さまの教えに迎え入れられると同時に、その教えによって

自分たちの迷いの姿に私たちが目覚めさせ続けられる教えの世界のことです。

私たちは「迷いの世界」に生きています。明治時代以降、私たちは国家のために身や命を捧げることが、最も美しく価値のある生き方だとされた時代がありました。また敗戦後、経済的に豊かになることがすべての目的と価値になり、産業振興や国土開発が優先され、その結果自然を破壊し、公害を發

生させ、地球温暖化を引き起こしました。

私たちは、その時代時代で、「迷いの歴史」を生きています。中国の善導大師は、浄土の教えに出遭うことを『広く浄土の門が開く』と表現されました。浄土は現実から遠く離れて開くではありません。

苦しみの真つただ中にいる私たちに、苦しみ・悲しみという形で現われた迷いのあり様とその問題を知らせるために、『仏さまの教えの世界が開いた』と言われるます。

穢土（迷いの世界）の真つただ中に浄土の世界が開くのです。浄土が開くことによって、私たちが穢土という迷いの世を生きていることが初めて知らされるのです。

東本願寺ブック「浄土」より

昨年五月の春季永代経法要の記念冊子として、ご参拝の皆様にお渡ししてあります。一度お読み頂きますようお願い申し上げます。



浄土に咲くといわれる白蓮華

仏教豆知識

第二十六回



日本の仏教

歴史 その⑨

江戸時代(中)

先回(二十五号)に述べました本末制度と並んで、江戸幕府の宗教政策のもう一つの柱が、寺檀制(檀家制度)です。

近世の寺檀関係は、特定の寺院に葬儀・年忌法要を依頼し、その寺院を維持する責任を持つ家と、その家を寺院が檀家とするところに成り立っています。

徳川幕府はキリシタン禁圧政策を徹底させるため寺檀制を推進させました。キリシタンの信者に改宗を命じ、改宗したことを檀那寺となった寺院から「寺請証文」を受けさせたことに始まります。やがて婚姻・奉公・移住などの場合にも、寺の檀家であることを示す証文を発行してもらうことが必要になりました。一六三五年(寛永十二年)以後、「宗門改帳」には、家ごとに家族・同居人の年齢・宗旨を記載し、寺が証明する方法でおこなわれ、結果的には戸籍としても機能しました。

このような寺請制と宗門改帳の作成は、宗教統制策の性格を持つようになり、徳川幕府の民衆掌握にも利用されていきました。

一方で、宗教勢力も支配権力の保障が得られるため、積極的に幕府の政策を受け入れましたが、反面では宗教活動には大きな制約を受けることになりました。

しかし、こうした制約の中でも、各宗教勢力は教学の振興と戒律の復興といわれる運動が起こってまいります。



徳川家光創建の日光東照宮

昨年末に中日新聞に掲載された国内十大ニュースの一番目は、「天皇陛下 退位意向」でした。▼二十八年前に即位されて以降、第二次世界大戦の、戦没者慰霊のため国内外を訪問され、平和の大切さを訴えられました。また東日本大震災など被災地を訪問、被災者を慰める活動を続けてこられました。▼「象徴としての地位と活動は不離一体」とのおこころで公務に勤しまれる姿は、多くの国民の共感を得ています。退位の意向を示された平成天皇のお気持ちに、安倍首相がハワイ真珠湾で対米戦争の犠牲者を慰霊し、「和解と寛容」とのメッセージを発表しました。今後は、侵略を行ったアジア諸国の犠牲者を慰霊し、「和解と寛容」の行動をとってこそ、日本がアジア諸国民からの信頼を得ると思います。